アルは今日も旅をする

建野海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルは今日も旅をする

【Ｎコード】
Ｎ９６９５Ｚ

【作者名】
建野海

【あらすじ】
東の武の国　ジャン
西の剣の国　フラム
南の知の国　トリア
そしてそれら三国に囲まれ、貿易国として栄えるセントール
何でも屋としてセントールに滞在する旅人フィードと彼の奴隷アル
様々な依頼をこなす中で彼らに訪れる出逢い、別れ、経験
彼らの騒がしい日々は今日も続く

プロローグ

始まりはそう、シンと静まり返った夜の事だった。

冷たく、人気のない地下牢に閉じ込められてもう何時間が経ったのだろう。一度も人が来ていないから、一体今が朝なのか昼なのかもわからない。

さっきからお腹は鳴り続けているけど、そんなことは今までいくらでもあったから気にしない。そもそも、今こんな風になってしまったのも、元を辿ればこの空腹に耐えきれなかった自分がいけなかったのだ。

叔母からの嫌がらせに耐えて、お腹が減るのを我慢して、露天に置いてあった果物なんて盗らなければ、こうして惨めに奴隷になんてなる事はなかったのに。

暗闇に慣れた目で左肩を見ると、そこには奴隷の証である烙印の紋章がくっきりと刻まれていた。簡易魔法で刻まれた契約の証、人以下である存在の紋章が。

罪を犯した自分を叔母は喜んで引き渡した。そして、売りに出された私はその容姿の珍しさからあっさりと富裕層の人間に買われる事になった。

そこまではよかった。そう、そこまでは。

案の定というべきか、私の容姿の珍しいのを他の富裕層に自慢したかったのか、私を買った少し小太りな男は私に首に繋がれた鎖を

引いて私を引き連れ回した。周りの人々は私を見るなり、

「ほう、これは珍しい。一体どこで手に入れたので？」

「いやいや、立派な買い物をなさりましたね。この者はおいくらでなら譲っていただけますかな？」

「あなたもまた変わった趣味をしていらっしゃる。見たところまだ十かそこらの少女ではありませんか。そのような趣味をしていらっしゃるとは知りませんでしたな」

などと、私をじろじろと見つめ、奇異なものを見るかのように接した。その中に一つも好印象なものは見られなかった。

私はこの姿に誇りを持っていた。死んだ母が私に残してくれたのがこの容姿だったから、たとえ人とは違っても、その事を卑下したことは一度もなかった。

だけど、それでも。見せ物になるのだけは嫌だった。母から譲り受けたこの姿がこんな風にして晒されるの岳は我慢ならなかった。

だから、この時になって私は自分を掴んでいる男に向かって体当たりをした。

結果は惨敗。男はよろめいただけで、自分に向かって反抗的な態度を取った私に、正確には私の烙印に命じて私を地に這いつくばらせた。

「この、奴隷風情が。そんなナリでも買ってやったというのに、この私に楯突くなんて……。せっかく話の種ができたと思ったが、こ

んな反抗的な奴隷では仕方ない。すぐにでも売りに出すとしよう。
おい！　誰かこいつを地下牢に閉じ込めておけ。明日には市の売りに出すから傷はつけるなよ！」

そう言って男に付き従っている数名が私を捕らえて地下牢に閉じ込めた。

そして、それから地下牢の扉が開く事はなかった。

さっきの話を聞くと、私はまた売りに出されるらしい。またあの壇上に上がらされて買い手の奇異なものを見る視線に晒されるかと思うと気が沈んで仕方がなかった。

せめて次に買う人はもう少しまともな人であってほしい。そんなことを考えて身体を丸めて顔を伏せたときだった。

ゴゴゴッ……ガタン

地下牢への扉が開く音が聞こえ、ゆらゆらと揺れる蝋燭の明かりが部屋の奥にある階段の上に見えた。

もしかして、いつの間にか朝になっていたのだろうか？

コツ、コツと石段を歩く音が周りに反響する。そして、しばらくして灯りとともに現れたのは一人の若い青年だった。

「あれ？　こんなとこに女の子が閉じ込められてるなんて聞いてないぞ」

と一人呟いた。そして私の事をじっと見つめた。

こいつも他の人間と同じか。みんな私のことをじろじろモノみたいに見て、何が楽しいんだろう？

そう思っていると、

「なあ、お前ここから出たいか？」

と、男が思ってもいない事を言い出した。

「べつに俺はどっちでもいいんだ。まあ、出たかったら面倒見てやるから早く出ろ。出たくないならそのままここにいろ」

一体何を言っているんだろう？　私はこの男の言ってる事が理解できなかった。

「ここを出たとしても、どうせ殺されます。だったら私はここに残っています。どうせ……どこに行っても同じですから」

「ふ～ん。だったら、ここを出ても安全って言ったらどうする？お前は好きにしていいって言われたらどうする？」

「それは……」

問いかけられて私は答えに困った。今まで言われた事をやるだけの生活だったから、自分でどうすればいいかだなんてことは考えた事がなかった。

でも、ここから出て自由になったとして一体自分はなにがしたいのだろう？　結局は変わらずに嫌な視線を向けられるのがオチだろう。

それならば、どこか遠く、自分が安心して過ごせるような場所に行ってみたい。

「どこか、遠く。私がいても変に思われない場所に行ってみたい」

そう男に伝えた瞬間。目の前にあった鉄格子の扉が強引にこじ開けられた。

「そっか。じゃあ、俺と行こうか」

男の馬鹿力に驚く間もなく、手を引かれ、勢いよく階段を駆け上る。

灯りのある場所に上がると、鉄格子をこじ開けた音が地下から上に漏れていたのか、騒ぎに気がついた人々の走り回る足音が少し遠くから聞こえた。

「マズっ！　ちょっと派手にやりすぎたなあ」

マズいといいながらちっとも不安そうな表情を見せない男をどこか不思議に感じながら見上げていると、私の視線に気がついた男が

「ん？　なんだ、不安なのか。安心しろって、俺がなんとかしてやるから」

「べ、べつに不安に思っていません。言いがかりはよしてください」

私の反論が可笑しいのか、男は笑って私の頭を軽く叩いた。明るい場所に出て私の容姿ははっきり見えるようになっているのに男は何も言わなかった。

「あ、あの。なんで何も言わないんですか。その……」

灯りに照らされてはっきりと見える白髪に赤眼。これこそが私が奴隷として小太りな男に買われた理由だった。

「いや、べつに姿なんて人それぞれだろ？　多少驚いたけど、それくらいで変に思う要素はないしな」

「そ、そうなんですか……」

今まで出会った事のある人とはまったく違う反応に私は戸惑ってしまう。

「ああ。そんなんで驚いているようなら俺の秘密なんてもっとすごいぞ。聞いて驚け。実は俺はな……不老なんだ」

それを聞いて私はこの男は頭がおかしいのだと思う事にした。勝手に出てきて勝手に助けて、私が今まで散々蔑まれて奇異の視線に晒されてきたこの容姿についても何も言わないで、挙げ句の果てには自分は不老だという。これをおかしいと思わないでどう思えばいいのだろう。

「ま、普通は信じねーわな。――っと、そろそろ向こうも来るな。俺からあんまり離れないようにして付いてこいよ」

そう言って男は私の前に出た。私はこの時そのままここに残るという選択肢もまだ残っていたのに、気づけばいつの間にか男の背を追っていた。

これが、私と旅人フィードの最初の出逢いだった。

第一話

この世界、名の付けられていないこの世界には一つの大陸が存在する。

大陸は大きくわけて四つの国が存在し、
東の武の国　ジャン
西の剣の国　フラム
南の知の国　トリア

ジャンは武芸に優れた国。武術や気を扱う人々や、それらを学ぶ人で溢れている。
フラムは剣技に優れた国。勇猛果敢な騎士たちが今日も人々を守っている。
トリアは魔術に優れた国。魔法に関する蔵書や、魔術の最先端である学院や魔術を研究するために訪れる人々も多い。

そして、それら三国に囲まれ貿易国として栄えるのはセントール。各国の情報や特産物などが入り交じり、どの国よりも賑わい人が行き交う国だ。

一見すると他の三国に比べて武力に劣ると思われるこの国だが、各国からの亡命するものが多く、彼らが集まって作った組織があるため、簡単には侵略される心配はない。

そのためか、なんらかの理由で国を追われた亡命者が次々とこの国に流れてきたため、この国は亡益国と揶揄される事もある。

物語は、そんなセントールの西側、剣の国フラムに近い小さな下

町から始まる。

「おーいオッサン！　なんか仕事紹介してくれ～」

下町にある酒場の扉を勢いよく開いて一人の青年が中へと入ってきた。まだ日も昇りきっていないこの時間帯では酒場にいる人もまばらであり、彼が勢いよく登場してきても誰も大きな反応を示しはしない。

初めて彼を見た者は何事かと一瞬驚き、しかしたいした事ではないと彼の言葉と雰囲気からすぐさま察し、食べかけていたパンに再び手を伸ばす。

この酒場の馴染みの者は最近ここによく顔を出すようになった青年の毎度の行動に呆れ、ため息を吐き、そして店主に同情の眼差しを向ける。

「おい、今うちは営業中だ。仕事が欲しけりゃ食事の一つや二つ頼んでからにしてもらおうか」

顔全体に深く生えた髭に、強面で体格のいい、暗い路地裏で一般人が出会った日には腰を抜かしてしまいそうな風貌をした中年の男性がカウンターの中で木製のグラスを拭いていた。

「そんな堅いこと言わないで紹介してくれよ。俺を路頭に迷わすつもりかよ」

愚痴をこぼしながら、青年はカウンターの一席に座った。

「そうだぜ、レオード。さっさとそいつに仕事でもなんでも紹介し

て撮み出しちまえ！　こう毎日毎日入り浸られたんじゃ、せっかくの酒がまずくなって仕方がねえ」

馴染みの客の一人がテーブル席から冗談混じりに文句を言う。

「うるせえ！　おめえだってこんな日中からろくに働きもしねえでうちに入り浸ってるじゃねえか。おめえとこいつに違いがあるならうちに金を払ってるか払ってないかの違いくらいだ」

すかさずカウンターの中からレオードが言い返した。その言葉に他の馴染みの客は「まちがいねえ」と頷いた。もっとも、頷いた彼らも結局のところ同類なのだという事に気がついていないのだが。

「そんじゃ、俺もここに寄付をするとしますかね。いつも仕事紹介してもらってるし。オッサン、俺アップルパイとラム酒ね」

「このガキ。頼むと言っておいてそいつはうちで一番安い料理とドリンクじゃねーか。どうせだったらもっと高いもん頼みやがれ！」

「え～。だってオッサンの料理ってそんな上手くないし、せっかく高い金を支払っていいもの頼んで、黒こげになったもんを食わされちゃたまったもんじゃないからね」

青年の一言にまたしても酒場に笑い声が響き渡る。「そりゃあそうだ」とか「おめえの負けだレオード」と言った野次が飛び交う。

「くっ……言わせておけば、好き放題言いやがって。おい、フィード！　俺は昔傭兵ギルドでも名の通った腕利きの傭兵だったんだ。あんまし馬鹿にしていると痛い目を見る事になるぞ」

フィードと呼ばれた青年はレオードの脅し文句に、

「みんな聞いたか？　ついに出たぞオッサンの謳い文句、傭兵レオード。一体それで今まで何人の女を口説いて相手にされなかった事やら」

その言葉にまたしてもドッとひときわ高い笑い声が上がった。ある者はテーブルをドンドンと勢いよく叩き、ある者は「また始まったよ」とレオードのいつものやりとりに呆れかえる。

この酒場の店主、レオード。彼が言うには彼は昔有名な傭兵ギルドで名のある傭兵だったらしい。その名を聞けば、誰もが恐れかえって彼に道を譲ったし、その任務成功率は相当な高確率だったようだ。実際、彼の身体には剣で切り刻まれたような痕や、魔法によって傷つけられたような痕もあるので信憑性は高いのだが、なにぶんこんな下町の酒場でそんなことを言っても、相手は酔っぱらいばかり。まともに話を取り合うわけもなく、みんなほらを吹いているのか、さもなければ妄想だと切って捨てていた。

もっとも、彼自身いつからここにいるのか知っている人は少ないし、実際体格の良さから一部の人間は実は本当じゃないのだろうかと疑っている。

しかし、彼が戦っている姿など誰も見た事がないので、結局冗談だとしてみんな扱う事にしているのだった。

「お前たち……今日は閉店だ！　おめえらもこんなところで油売ってないでとっとと仕事にでも行ってきやがれ！」

レオードは怒声とともに木樽を酒場の中央へ放り投げた。

さすがにマズいと思ったのか、怒りの矛先を自分に向けられたくないと思い、酒場にいた人々は代金だけ置いてそそくさと外へ出て行ってしまった。
ただ一人フィードを残して。

「ほら、これで仕事もなくなった。早いとこ俺に仕事を紹介してくれ」

レオードの怒りもなんのその。気にした様子を一切見せず、フィードはいつもの調子で話を続けた。

いつものことながら、相手のペースに乗せられたことにようやく気がついたレオードは沸き上がる怒りを抑えて、しぶしぶフィードの要求を飲むことにした。

「まったく、お前が来るとうちは商売上がったりだ。頼むから二度とこないでくれ」

「そんなことといって、俺が来たときはみんな盛り上がっているじゃないか」

「お前が余計な事ばかり言うからだ！」

カウンターの奥から何枚かの羊皮紙を持ってきたレオードはフィードの目の前に勢いよくそれを叩き付けた。

「ほら、お前が欲しがっている仕事だ。どれでもいいから好きなのを選べ！　なんなら全部やってもいいんだぞ」

「いや、そこまで欲しいと思っていないから。どれどれ……」

目の前に置かれた羊皮紙に書かれた内容をフィードはじっと見つめた。そこには下町に関する事件や人手の足りない作業の手伝いに関する内容が書かれていた。

「なになに？　中階層の建築の手伝い。土木作業じゃねえかこれ。嫌だよあんな男臭いところにいくなんて」

「仕事を紹介してもらってる立場で文句を言うんじゃねえ。だいたいお前なんでこんな風に仕事紹介してもらうなんていう形式をとってるんだ？　そこらにいけば仕事なんて溢れるほどあるだろうが」

「う～ん。べつにそうしてもいいんだけど、なるべくみんなの手に負えなくて困ってそうな任務をこなしたいし。せっかく自分にできる事があるならできるやつがそれをやるべきだとは思わない？」

「まあ、そりゃあそうだけどな」

確かにフィードの言った通り、できるやつがやれることをするべきだという考えはレオードにもある。しかし、比較的身分への差別が少ないこのセントールでもやはり格差が存在し、中階層、上階層の人間に比べれば下町の人々は魔術師や傭兵などといったものに依頼を頼む余裕がない。そのため、何か事件が起こったとしても自衛が基本になってしまう。

もっとも、どうしても手に負えないような事件が起これば騎士団や魔術師団に依頼を出すのだが、彼らも下町の人々だけしか被害が出ていないうちは中々動こうとはしないのだ。中階層、上階層に被害が出てようやく動き出すといった感じである。

だからこそ、今ではすっかりこの下町に馴染んだフィードたちが初めて下町で起こった事件を手伝い解決した時、何も金銭などを要求しなかったときはこの町の誰もが疑ってしまった。元よりよそ者、しかも亡益国と揶揄されるこの国に腕の立つものが現れたら警戒しない方がおかしい。きっと彼らもどこかの国で何か事件を起こし、亡命してきたのだろうと誰もが思ったのだ。

「ん？　どうしたの、そんなにじっと俺の事見て」

見たところまだ二十にもなっていなさそうな容貌をしているのに、どこか激戦をくぐり抜けてきたような貫禄も感じる。本人は何も言わないが、やはり訳ありなのだろうとレオードは勝手に考える。

「いや、特に何もない。いいからお前はさっさと仕事を選んで出て行きやがれ」

ぶっきらぼうに言うが、仕事を紹介し、フィードを無理矢理追い出す事もないレオードは彼に信頼を寄せているからだろう。

「それじゃあ、こいつを貰ってくよ。任務成功したら報酬を町長から貰っておいてくれよ。それじゃあ、またな」

「二度と来るな、このくそったれが」

ひらひらと羊皮紙をはためかせ、フィードは酒場を後にした。そんな彼の背を見送りながらレオードは残った羊皮紙を片付ける。そして、それらに一通り目を通したところで気がついた。

（ったく、あの野郎。なんだかんだ言って一番面倒な仕事を持って

行ったじゃねえか。本当に素直じゃないやつだ）

数枚あった仕事の依頼でフィードが持って行ったのは今下町を一番騒がせている事件、盗賊による被害防止の依頼だった。

第二話

酒場を出たフィードは羊皮紙を上着のポケットに仕舞い、下町をぐるりと周り始めた。

先ほど見た羊皮紙にはここ数日下町を騒がせている盗賊による金品の盗難被害について書かれていた。娯楽や刺激の少ない下町では、ちょっとした事件でさえすぐに噂になる。盗賊が現れたとなり、しかもその事件が連続で何件も起こったとすれば下町にいる人間の誰もが今ではこの事件について知っていた。

自分が被害に遭わなければ他人のちょっとした不幸なんてものは他の者にとっては話の種にしかならない。そのはずだったが、それも昨日の事件によって少々事情が変わった。

昨晩下町の外れにある民家に盗賊が侵入し、侵入した盗賊に気がついた民家の家主が逃げようとしたところを後ろから切られて殺されたのだ。これまでは家主のいない時間帯を狙って金品を奪っていた盗賊だったが、ここに来てボロが出た。

そもそも、夜盗のような盗賊ならまだしも、自警団や騎士団がいる都市部で盗賊など滅多に見かけないはずなのだ。地形に詳しくなければ、すぐに足がつくし、下町などの金品を奪ったところでその金額などたかが知れている。しかも殺人を犯してしまってはいよいよ追いつめられてしまったといえるだろう。これ以上被害が広がるようならさすがに騎士団といえど動かざるを得ないだろう。

しかし、騎士団を動かすとなると、それこそ隊によっては法外な金額の謝礼を請求される事もあるため、そうなる前に事件を解決し

ようとフィードは依頼を受けたという事である。

事件のせいか、普段に比べて露天も少なく、人通りもまばらだ。大人はもとより、子供の姿など見つける方が難しい。

「困ったな。事件について話を色々聞きたかったんだけど、こうも人がいないんじゃどうしようもできない」

今更先ほどの酒場に集まっている人に話を聞いておけばよかったと後悔するフィード。とはいっても彼らを追い出したのは彼自身なので自業自得なのだが……。

と、きょろきょろと辺りを見回していると、ドンと軽い衝撃がフィードの腰元に響いた。

「お？」

よく見ると小さな子供が勢いよく走り抜けた際にフィードにぶつかったようだ。普通の人ならばそのように見えただろう。しかし……。

「ほー。俺から金を盗むとはいい度胸をしてるじゃねーか」

いつの間にか腰に付けていた硬貨袋がなくなっている事に気がついたフィードは走り去る少年の背を見つめながら呟く。その表情にいつものような笑顔はなく、どこまでも冷めきった表情が浮かんでおり、彼の横をすれ違う者は道をあけるほどの不気味さだった。

「世の中を舐めてると痛い目を見るってことを俺が教えてやるとするか」

そうしてフィードは少年の背を勢いよく追いかけ始めた。

日が沈み始め、外に出ていた露天が店じまいを始めた頃、路地裏の一角で木箱に腰を預けて息を切らしていた一人の青年がいた。

「く、くそ。あの糞ガキ共。手加減してやっていれば調子に乗りやがって……」

空を仰ぎ、息を整えながら負け惜しみの言葉を吐き出すフィード。そう、結果だけ言ってしまえば彼は結局金を盗まれたままだった。

あの後、金を奪った少年を追いかけたフィードは行く先々で少年の仲間と思われる別の少年少女たちの妨害工作にあった。時には積み重なった木箱を倒され道を塞いだり、糞の入った小樽を投げつけてきたり、妨害工作に失敗して怪我をしたと思った少女に慌てて声をかけたらナイフで胸元を狙われたりした。最後は正直胸元を擦って危なかったが、それ以外はどうにか切り抜けれていた。

しかし、途中で少年少女が多数入り混じったせいか、誰が硬貨袋を持っているのかがわからなくなってしまい、結局取り逃がす事になってしまった。

「しまったな……ガキだと思って油断しすぎた。こんなことがアルに知れたらまた文句を言われるに違いない」

名目上は自分の奴隷である白髪の少女のことを思い出し、フィードの気分は一気に下降した。ただでさえ毎日小言を言われてうんざりしているのに今回の件がしれたら余計に小言が酷くなるというこ

とが用意に想像できたからだった。

仕方なくもう一度少年たちを捜しに行こうと木箱から腰を上げて前を見てフィードはようやく気づいた。自分の前方にフードをかぶった見慣れた少女がいるということに。

人目を引く赤色の眼にフードに隠れきれていない部分からはみ出す白髪。アルビノと呼ばれる種の少女がそこには立っていた。

「さて、さっきからぶつぶつと独り言を呟くマスターに私はどう反応したらいいかわからなかったので、こうしてずっと待たせてもらいましたが、私に知られるとマズい話でもあるんですか？　マスター」

突然の少女の登場に動揺を隠せないフィード。少女のこめかみにはうっすらと筋が張っている。

「よ、ようアル。こんなところで会うなんて奇遇だな」

「奇遇なんて白々しいですよマスター。私に食材の買い出しを頼んだのマスターじゃないですか。酒場に行っているって聞いていたので行ってみればレオードさんにマスターはとっくに出て行ったと言われましたし、荷物を置いて探しに出てみればこんなところで倒れ込んでますし、なにやら私に知られたら行けないような事をまた起こしてるみたいですし。一体今度はなにをやらかしたんですか」

「今度はって……毎回何か起こしているようにいうんじゃねーよ」

「マスターが動いて何もなかった事の方が少ないんですからしょうがないじゃないですか。私のときだって……」

「そう言われてもな……実際降り掛かる火の粉を払ってるだけだし」
「そういうこととしてるから厄介ごとに巻き込まれるんですよ」
ため息を吐き、アルはフィードの横に近づいた。そして、
「それで、結局今回は何をしたんですか。マスターが色々な面で駄目な人だと言う事は今まで一緒に行動してきてもうわかっていますから、早く言った方がマスターのためですよ」
身を乗り出し、問いつめるアルにフィードはとうとう根負けして、
「いや、実はな……」
と先ほど起こった事を説明しだした。

「ハァ。もうホントに私のマスターはどうしようもないです。本当に駄目駄目です。何でこんなのが私のマスターなんでしょう。いっその事私がマスターになりたいくらいです」
アルと合流したフィードは下宿先である宿に帰り、一階の食事場で食事をとっていた。
「まあ、まあ。アルちゃんもその辺にしておきなよ。フィードさんだって悪気があってお金を奪われたわけじゃないんだから」
温かな湯気の立つ野菜スープを運びながら中年の女性がアルに口を挟む。

「それは当たり前ですグリンさん。悪気があってお金を盗られるなんてことがあったら最悪です」

グリンと呼ばれた中年の女性はそんなアルに苦笑しながらフィードとアルの前にスープを置いた。

「でもアルちゃんはフィードさんに養ってもらっているんだろう？だったら文句を言っちゃ行けないよ。こういった時に助け合うのが家族ってもんじゃないのかい？」

グリンは背中まである長いくせ毛をなびかせて言う。アルもグリンの言っていることは内心理解しているからか、つい口ごもってしまった。

と、ここまで来てようやくそれまで黙っていた話の当事者が話しだした。

「本当に悪かったな、アル。それとグリンさんもなんだかすいません。気を使わせたみたいで」

「いいんだよ。あんたが悪い奴じゃないってことは今までの下町での活躍を見てればわかるからね。それにアルちゃんのことも。あたしは奴隷にこれだけコケにされる主人ってのも見たことなかったしね」

グリンのその言葉にフィードは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それで、お金の事はともかく、今回の依頼って言うのはやっぱりあれかい？」

フィードが酒場を通じて下町のやっかいな依頼を受けている事を知っているグリンは気になっていたことを尋ねた。

「ええ。おそらくグリンさんの想像している通りです。盗賊の被害の防止、もしくは盗賊の捕縛ですよ」

「やっぱりそうなんだねー。ここ最近この辺りもその件で騒がしくなっていたし、昨日なんて死人が出たらしいからね。そろそろ依頼が出る頃だろうと思ったよ。うちの騎士団は下町の為になんて動いちゃくれないし。ここがフラムだったら話は違ったんだろうけどね」

フラムという名前を聞いて一瞬フィードの表情に影が差した。しかし、それに二人が気がつく前にいつもの表情に戻ったため、誰もフィードの変化に気づく事はなかった。

「そうですね。フラムなら騎士団は身分など関係なく誰にでも助けの手を差し伸べますからね。一番治安がいい国も実際あそこですし」

「そうみたいだねえ。特にここ最近出てきた何番隊だったかの副隊長さん。たしかリオーネとかいったかしら。女性なのに他の隊の隊長と変わらないくらい強いみたいだね。しかも、あたしたちみたいな下町の人にも救いの手を何度も差し伸べてくれているみたいだし。本当にあんな人がうちの国にもいてくれたらいいんだけどね」

「そうですね。まあ、彼女みたいな人の代わりにならないかもしれないですけれど、俺も頑張らせてもらいますよ」

「せいぜい稼いできてもらうよ。お金をなくしたからって家賃を見逃すほどあたしは甘くないよ」

「依頼を早いとここなさないとな」と気を落とすフィード。アルはその横でのんびりと野菜スープを口にしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9695z/

アルは今日も旅をする

2011年12月31日18時56分発行